

コロナで学校生活が様々な困難を抱えている中、応募がどうなるかと心配しましたが、たくさんの方が作品が集まり、うれしく思いました。今回最終選考に残ったのは8作品でしたが、例年に比べてその8作品の優劣は必ずしも決定的なものではなく、評価が分かれた面もありました。

そうした中で、優秀賞の「いちばん覚えているもの」は、比較的高評価がそろった作品で、なにより作品の“芯”がしっかりしています。つまり、この作品で何が書きたかったのかということが読者によくわかるし、それをしっかり読みとれる作品になっています。キーワードともいえる「人が人を忘れる順番」というのも、効果的でした。ただ、この作品は本来もう少し枚数が要ると思います。あまり説明的でないのは良いのですが、〈私〉が高校の何年生かもわかりません。高1と高2と高3とでは、三宅君との別れのニュアンスがかなり違ってくると思います。僕は、例えば、彼らは今高2で、三宅君は高1の時に転校してきた子で、私は高2になって初めて同じクラスになった、三宅君は転校慣れしているらしい……といった設定を考えてみました。そういう登場人物のバックボーンを感じさせてくれる部分があると、この作品はもっと深みのある作品に仕上がっただろうと思います。

奨励賞の「カメタさん」は、なかなか鋭い作品だと感じました。ただ、最初に読んだ時はよくわかりませんでした。二回目、三回目になって、作者が仕掛けているものがはっきり見え、なるほどと思いました。自分が生み出した存在が、思いもよらない存在になって自分に向かってくるというパターンは時々ありますが、この作品ではカメタさんは決して〈私〉を責めません。言わば、自分の分身であるものが、「他者」となるわけです。しかし、真黒な写真が、カメタさんが（あるいは自分自身が）〈私〉を本当の所では許していないことをも感じさせます。そういう意味で鋭い作品だと感じたわけですが、しかし普通の読者は二回も三回も読んでくれません。作品の中での情報やヒントの散りばめ方を、様々な作品をより分析的に読むことで学んでください。

もう一つの奨励賞「花になったクラリッサ」は評価が分かれた作品でした。僕が評価したのは、なによりも短編としての切れ味という点でした。もう少し長く、あるいはこんなに枚数は要らないといった作品が多い中で、この作品はこの長さの中でこそ生きる作品だと思います。細かい点でいえば、冒頭の「すぐ問診」は「すぐ往診」でしょうか。そして、「誰か急病人でも」という台詞は、「私を匿ってほしいんです」のすぐ前でもいのように思いました。最後の3行は微妙ですね。これをなしにして終わらせることも多分作者は考えたと思います。どちらが正解かは難しいですが、僕はこの3行で読者に（作品世界との）橋が架けられたように思いました。